

「でんきと私」

兵庫県立洲本実業高校 電気科 2年

村上 宙

技術とは、「力」である。

人類が、火を使い始めたのはおよそ150万年前から20万年前とされている。人よりもずっと大きく、力もある恐竜が栄えたのは2億2500万年前から7000年前とされ、恐竜が1億5000万年かけて到達できなかったところへたった150万年でやり遂げてしまっている。人類の歴史とは、進歩し続ける技術史そのものといえるだろう。

利便性を高めたこの技術発展により、練度の差こそあれど、誰でもその恩恵を享受できる。たとえ華奢な女性であってもパワーショベルやジェット旅客機でさえも慣れさえすれば自由に扱える。おそらく、核兵器ですら扱えるだろう。もちろん、それらが容易に手に入るものではないことは、当然のことである。

しかし、閲覧さえもできなかった高度な情報が、いとも簡単に手に入る社会になってしまっている。情報化社会となった現代では地球の裏側とも容易に情報のやり取りができるようになり、その危険な「力」も容易にやり取りができてしまうのだ。そのような「力」を持ってしまっている自覚が今の現代人にあるのだろうか。何も「力」だけがというより「情報」も時として大きな危険を孕んでいる。私たちは今、誰でも簡単に「力」が手に入れられることを忘れてはならない。簡単に誰かに損害を与えられたり不利益をもたらせるような「力」をあることを忘れてはならないのだ。

たとえば、原子力発電技術はその最たるものと言える。確かな発展をもたらす圧倒的なエネルギーを得られるが、そのエネルギーを生み出すためには、人間どころか生態系に危害が及ぶ大きなデメリットがある。福島第一原発事故に端を発した放射能汚染問題は、日本の問題というより世界的な環境問題のひとつである。エネルギー生産者だけにその責任を押しつけるのではなく、エネルギー消費者にもその責任の一端があることを自覚しなければならない。

これから先、人間はまだまだ進化し続けるだろう。ここ百年、さらに技術の発展は加速しており、まだまだ終わる気配はない。当然、進化することは良いことだと思う。しかし、昨今の情勢・ニュース・報道を見ているとこのまま人間が新たな力を手に入れたとすると、それが大きな災禍へと繋がってしまうのではないのだろうか。

これから技術の進歩とともに人類が新たな「力」を手に入れるとき、その正しい扱い方も学ばなければならない。